

# 建物ストックの観光的利用における価値と再生のメカニズム

—過疎地における廃校施設再生を事例に—

## Values of Building Stocks for Tourism Purpose and the Mechanism for Revitalization:

Case Studies of Reused School Facility in Underpopulated Area

岡田 明子

OKADA, Akiko

過疎地における廃校施設について、観光的再活用における価値と再生のメカニズムを探る。廃校施設が果たす記号的役割から多様な価値や現象が派生し、それらが相重なることで廃校施設の再生・維持は実現する。再生の促進要因には、公民連携体制による取り組み、事業性、参加者自身が生み出す商品性が挙げられる。

キーワード：廃校再生 (reused school facility)、コンバージョン (conversion)、アフォードンス (affordance)、公民連携 (public private partnership)

### 1. はじめに

#### (1) 研究の背景

持続可能な社会環境づくりや地域振興は今日的な課題である。それらへの対処策として、建物ストックを有効活用し、環境負荷低減や地域活性化につなげることで、また経済波及効果が高い観光振興による地域づくりの推進等に大きな期待が寄せられている。このような社会状況を背景とし、地域振興が喫緊の課題である過疎地において、文化財的な価値を持たない建物ストックながらも少なからず再生されている廃校施設に着目する。何故なら、一般的に再生への動機付けとなり易い文化財的あるいは不動産ビジネス的な価値以外の価値が廃校施設には存在し、それらが観光的利用の際に活かされてストック再生が実現していると考えられるからである。本稿ではケーススタディ等を通じて、観光的再活用に際し廃校施設が持ち合わせているであろう価値と再生へのメカニズムを探ることとする。

#### (2) 既存研究

建物ストックの再生に関する研究（建物のコンバージョンによる都市空間有効活用技術研究会、2002）の他、廃校再生に関する研究には、廃校施設の実態調査（廃校施設の実態及び有効活用状況等調査研究委員会、2003）（以下、『廃校施設報告書』）等がある。しかし、観光的利用という観点から廃校施設再生に着目する研究はなく、新しい視点だといえる。

#### (3) 研究の目的

本研究の目的は、①過疎地における廃校施設が持ち合わせている、観光的利用に寄与する固有の価値（以下、廃校施設の価値）を明らかにし、②それら固有の価値と廃校施設再生との間にあるメカニズムを分析し、及び③廃校施設再生の素地となる諸要因を見出すことにある。それら、廃校施設のコンバージョンを促進しうるメカニズムと諸要因を解明し、今後の持続可能

な社会形成、及び観光振興による地域活性化への一考を得ることとする。

#### (4) 研究の範囲と方法

本稿では、2003年に文部科学省が発表した「廃校リニューアル50選」を参考に、過疎地における観光的利用に分類される計11事例<sup>1)</sup>を調査対象とし、文献及びHP調査、アンケート調査<sup>2)</sup>、及びフィールド調査<sup>3)</sup>の上で、アフォーダンス理論(後述)によって分析した。なお、本稿での用語は以下のように定義する。「建物ストック」：使用状況にかかわらず、現存する建物全般。「廃校舎」：廃校となった学校施設のうち、校舎。「廃校施設」：廃校となった学校施設のうち、校舎、校庭、その他付属物を含む施設全体。「コンバージョン」：建物の用途を変更すること、転用、用途変更。(建物コンバージョン研究会、2002, p.6)

### 2. ケーススタディ 1：岩手県葛巻町「森と風のがっこう」

#### (1) 「森と風のがっこう」、及び葛巻町について

岩手県葛巻町にて2001年に設立された「森と風のがっこう」(以下、「森風」)は、過疎化により1996年に廃校となった旧葛巻町立小屋瀬小中学校上外川分校(木造平屋建て、延べ面積248平方メートル)を再活用した自然体験活動施設である。東京出身で岩手子ども環境研究所代表の吉成信夫、常勤スタッフである企画運営者3人、外部講師、臨時スタッフ等により企画運営されている。('森風'HP、『廃校施設報告書』) 木造廃校舎やかつて図書室であった青い車掌車等、学校時代の様子そのままに活用している。



写真1：「森風」外観

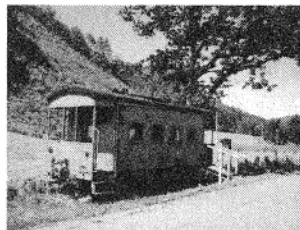


写真2：旧図書室の車掌車



写真3：内部廊下

(いずれも、筆者撮影)

葛巻町は第三セクター方式で「くずまきワイン」などの地域産業を新規に育成する他、「森のそばや」等のコミュニティビジネス、風力発電など自然エネルギーの開発や導入等、多様なまちづくりに公民連携のもと積極的に取り組んできた地域である。(鈴木, 2001)

#### (2) 企画運営者の立場から見る廃校施設の価値

##### 1) 廃校施設の価値に対する企画運営者の意識

企画運営者に廃校施設の価値を尋ねると、代表の吉成は「地域にくっついている根っこ」、吉成と共に設立・運営に携わってきた永留百合は、「地域の人々の想いやつながり。卒業校に対する心のつながりや愛着」、常勤スタッフの石川伊佐男は「地域の人々の支え」と、即答した。吉成は、活動場所の選定時から地域住民とのつながりを意識していた。以前は図書室であった青い車掌車に対し、「わざわざお金をかけてもここまで車掌車を移動させて置こうとしたPTAの方々と先生の熱意がきってどこかにあったのだ。その思いのようなものを引き継ぎたい」(吉成, 2003, p.122) と思い、「地域の人々がそこまでして子供のことを想う場所なら、きょううまくいくだろうと考えて選定したとのこと」(永留談) から、「半年探して見つからなかつ

た廃校が、一瞬で見つけた」(吉成, 2003, p.122)と述べている。「廃校施設を通じて地域とつながっているからこそ、イベント時に支援や参加がある」(永留談)、「スタッフや箱モノだけでは活動できず、周囲の協力や支えが不可欠」(石川談)と、指摘する。また、「小岩井農場内の廃校利用も検討した。某財閥系企業の子弟のための学校であったという出自から、もともと生活が存在していない廃校であったゆえ選定しなかった」(吉成談)、「環境的にも地域の人々の想いという点でも、実際の生活に根ざした循環系を作り出したい」(永留談)と述べ、地域や実生活と活動とのつながりを重要視する。

## 2) つながりを維持するための企画運営者の行動

企画運営者は廃校施設を通じた“地域とのつながり”の維持のため、廃校施設に残る設えをほぼ手付かずの状態に残す努力をしてきた。今も校舎入り口脇に残る「上外川分校」の木製銘板、旧教室入り口上部の「小4・5」等の表札、図書室だった車掌車と書籍等、学校当時の面影が保持されている。「活動を始めて3年間は施設に手を入れなかった。それは地区の人達が納得しなかっただろうからだ。4年目の2004年になり、初めて手を入れた」(吉成談)、「施設は町からの借用。購入すれば地域との縁も切れ、うまく活動できないだろう」(永留談)、と語る。また、つながりを強化するために、周辺山林の下草刈り等の地域行事へ参加し、「森風」の新しい交流の場とするコミュニティカフェの建設にも取り組む。

## 3) 廃校施設に対する地域住民の関心の表れ

地域住民と廃校施設のつながりは、残されたカタチや地域住民の現在の行動に表れている。校庭脇の石碑には、「葛巻町立小屋瀬小中学校／上外川分校跡地／山ふところ／山ふところのそこそこに／十といくつの家々が／力合わせて すまいする／上外川の ふるさとよ／昭和3年開校／平成8年閉校」とある。また、「朝早く、近所の人々が『森風』の様子に興味深げに覗いていたこともあった」(吉成談)、「校庭にクローバーを植える為に泥団子を撒いた時、何をしているのかと地区の人から質問された。今後の整備計画を話し、納得してもらった」(永留談)と、地域住民の行動と関心の高さを語った。「廃校をきれいに維持してほしいとの要望が今もあり、常に地域の人々の厳しい目を感じる」(永留談)という。

本調査の晩、「うまくできなかったけど」と言いつつ、20数名分のトコロテンを差し入れた地区住民がいた。懇親会の輪に入らずとも、大変うれしそうな印象であった。臨時スタッフとして参加した葛巻町在住Jは、手伝う喜びを満面の笑顔で語る。子供だけが参加できるプログラムの時も、小学校高学年である子息の参加を理由に手伝いに加わるという。

このように、企画運営者は“地域住民とのつながり”を価値として強く認識し、維持する努力をしている。実際、カタチや地域住民の行動から“つながり”があることが伺える。

## (3) 参加者の立場から見る再生廃校施設の価値

講座講師と参加者、延べ17人のうち計6名に対し、廃校施設の価値、参加理由、関心事に関し、個別にインタビュー調査をした。参加者Aが即答した廃校施設の価値は、「子供の歓声でにぎやかだった頃のことが想像できること」である。Aは「森風」に活動開始当初から参加し、「子どもオープンデー」(以下、「子どもデー」)ではスタッフ役を務める。「将来は病院で子供の先生をしたい」と、子供に興味がある。東京の農学系大学院にてパーマカルチャーを研究する参加者Bは、「森風」のパーマカルチャー講座に数回参加している。廃校施設の価値は、「講座の開催場所として、施設や環境の面で実体が伴っていること。実感を伴って理解できる環境だ。他主催講座に比べ、『森風』が一番興味深い」と即答した。

他の4人は回答に間があった。パーマカルチャー講座講師である酒匂徹は「子供が集まりや

すい場所」を価値に挙げた。「大人向け講座だが、実践内容のエッセンスを子供にも伝達できる。実体の伴った環境教育の実践場所だ」と語る。岩手県東和町で農業を営む酒匂は、パーマカルチャーを農業や生活の中で実践しつつ、普及活動も行う。盛岡市の大学院生である参加者Cは「子供の歓声が染み付いていること」を価値に挙げた。子供への関心と多様な人と出会える楽しさから、「子どもデー」開始以来スタッフを続ける。青森県十和田市教育委員会の参加者Dは「泊まれる施設であること」を価値に挙げた。パーマカルチャーへの興味から参加したという。岩手県平泉町の小学校教員である参加者Eは「子供が親しめる周囲の自然環境」を価値に、また参加理由に地域総合学習への興味を挙げた。

このように、廃校施設の価値や参加理由等について、人によって多様な回答があった。

#### (4) 廃校を取り巻く地域特性

「森風」立ち上げに、葛巻での公民連携によるまちづくりの経験が関与している。吉成は役場に廃校施設の紹介を願い出て、教育長、町長、また上外川地区の地区長へと話は取り次がれた。これに関し、「わずか1ヶ月足らずで学校の使用を心良く認めてくれた葛巻町の決断の迅速さは強調しておきたい」、また役場の紹介者に関し、「『森のそばや』を地域のお母さんたちと起こした、まちづくりプロデューサーとして知られた方がいたことは幸運な巡りあわせ」（吉成，2003，p.122）と評す。コミュニティビジネスである「森のそばや」の立ち上げを通じ、住民との協働まちづくりを経験した行政担当者が、自然体験活動の拠点となる廃校を探していた吉成に旧上外川分校を紹介し、活動は実現したのである。

活動開始後も、「森風」と行政との連携は継続する。始動直後の活動に、葛巻町長や教育委員会教育長、「森のそばや」のお母さんたち等、行政や地域住民が多数参加した。（「森風」HP） また、「子どもデー」に関し、吉成は「教育委員会とのゆるやかな、いい連携関係がある」と語る。それは行政と「森風」との役割分担を差し、「町が子供を集めてバスで送迎し、広報もする。プログラム提供は全て『森風』に任されている」という。

廃校再生を受け入れる土壌は他にもある。町の施策と「森風」の活動内容との関連について、『森風』の活動テーマの一つを自然エネルギーとしたが、既に町が取り組んでいたので、支障なく受け入れられた」、また葛巻の地域性について、「ここには暮らしの原型といったものが残っている」と吉成は語る。この「暮らしの原型」とは、パーマカルチャーが目指す生活体系、すなわち「自然に対する観察と理解、先人の知恵の中の科学的知識を基盤とし、それらを現代に再編集することで持続可能な環境をつくり出そうとするシステム」（中野，1995，p.57）に通じる生活観が残る地域ということである。

このように、公民連携体制や地域特性活用は、廃校再生を受け入れる素地となっている。

### 3. ケーススタディ2：栃木県塩谷町「星ふる学校『くまの木』」

#### (1) 栃木県塩谷町「星ふる学校『くまの木』」について

栃木県塩谷町にて2002年に活動を開始した「星ふる学校『くまの木』」（以下、「星くま」）は、過疎化により1999年に廃校となった旧塩谷町立熊ノ木小学校を再活用した宿泊型体験学習施設である。明治時代に開校し124年の歴史を有した旧熊ノ木小学校は、木造平屋建て、延べ面積1,173平方メートルの施設であり、自然豊かな環境の中にある。特定非営利活動法人（NPO 法人）塩谷町旧熊ノ木小学校管理組合、及び地域住民の会員が中心となり企画運営する。自然観察や農林業体験の他、特色ある活動に天体観察があり、直径3.5m、口径25cm 望遠鏡付き天体ドームが校庭に設置されている。（「星くま」HP、『廃校施設報告書』） 木造廃校舎の内外観や校庭



は、かつての学校の面影を十分に残す。旧教室は宿泊室、展示室等に転用され、廊下沿いに各地からの来館者の手紙が掲示されている。

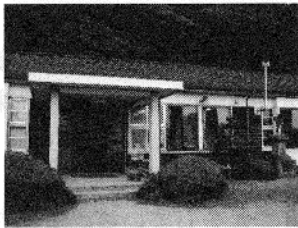


写真4：「星くま」外観



写真5：廊下



写真6：展示室

(いずれも、筆者撮影)

「星くま」が所在する栃木県塩谷町は、宇都宮市から北に直線距離約25kmに位置する、「農工両面の町」である。2004年11月1日現在、塩谷町の人口総数は13,763人で、昭和20年代初めの2万人超から漸減している。「星くま」付近には、環境庁より名水百選の認定を受け、1996年には湧水利き水日本一にも選ばれた尚仁沢湧水がある。(塩谷町 HP)

## (2) 企画運営者の立場から見る廃校施設の価値

企画運営者であるLは、再生への経緯や廃校施設の価値等について以下のように語った。「廃校から『星くま』始動までの経緯は、まず木造校舎で安らぎの場を提供したいとの想いが発端である。廃校選定時は各地の教育委員会に相談し、町や地域住民が前向きだった塩谷町に決めた。『廃校を残して有効活用したい』との地元要望が先にあり、検討委員会での1年数ヶ月の議論を経て、自然体験学習施設として再生が決まった。最終的に、町からLに対し運営責任者への就任要請があり、町の施設を借りる為にNPO法人を設立した。当初は13名の理事だったが、思惑の違いや、町からの依頼で評議委員的な意識の人も多く、歩調が合わなかった。現在は自主性と責任感を重んじ、NPOの活動ミッションに賛同する5人の理事で構成する。ビジネス的收入も大切だが、NPOの活動趣旨をより大切にしたい。大手旅行会社からタイアップの申し出もあるが、大量に客を送り込む故に断っている。

NPOが重視する活動に、くまの木自然クラブ（以下、『自然クラブ』）がある。人と自然の育成と、小4から中3まで学年を超えた交流を目標に、町内各小中学校計10校にて勧誘し、2004年から活動を開始した。域外と地元との交流促進も目標である。体験学習では、来訪者と指導者との接点はあるものの地元住民との交流は難しく、それを解消したい。都市部の児童の野外授業と『自然クラブ』との交流等に発展することを期待している。

体験メニューの一つに天体教室がある。塩谷町は環境庁主催『星が良く見える場所』調査で、平成12（2000）年度冬季に全国1位となった。理事でもあるアマチュア天文家の発案で、天文活動をアピールも兼ねて取り入れ、愛称にもした。地域特性活用が注目され、高校天文部の合宿もある。天文観察が一番の人気メニューで、そば打ちが2番目。年間参加者約2,000人の内、天体教室参加者は500人を超える。『星くま』の活動から、地元住民にも日本一になったことが周知され、町のキャッチフレーズも『星と名水の里』となった。

廃校施設の価値は、木造廃校舎がもつ安らぎや癒しの効果、及び子供の活動の場であることだ。最初から、RC造でなく木造廃校舎を探していた。かつての会社勤務時はストレスも多く、また子供もストレスを感じている。子供と大人共に木造校舎で安らぎの場を提供したい。宿泊施設への改造は必要最低限に留めてもらうよう、町に請願した。従来の雰囲気がある程度残っ

たと思う。廃校施設に“懐かしさ”を感じる来館者も多く、特に40代後半から50-60代の中高年の感想に多い。各人の学校時代との共通性から、そう感じるのだろう。木造校舎、朝礼台、二宮金次郎像等、外見的にはかつてどこにでもあった原風景ともいえる。予想してくる人もいるが、多くの人は来て初めて懐かしいと思うのだろう。」

このように、企画運営者の立場から、廃校再生経緯における行政や地域住民との協調体制、地域特性と活動内容等について発言があった。廃校施設の価値には、木造廃校舎の癒し効果、及び子供の活動場所を挙げた。来館者の感想には“懐かしさ”が多いと語った。

更に、「星くま」と地域住民や行政とのつながりについて、Lは以下のように語った。

「約40の体験学習メニューがあり、町住民を中心に54名が指導者登録をしている。そば打ちの人気は高く、70歳代のおばさんが多い。指導を楽しんでいる人は、依頼時に快く受けてくれ、そうでない人は何かと理由をつけて断ってくる。多種のメニュー提供は大変だが、最初の意気込みで今のところ維持している。有機水稻栽培のように、指導者が途中降板したメニューもある。指導役を引き受けてくれる人がいて初めてメニュー提供が成立する。やりたいプログラムが先にあっても、それを指導してくれる人材を探すのは難しい。

地域住民の意識に関し、卒業生や地元を離れた人もよく訪れ、廃校を再生して残してくれたと感謝がある一方、各々の期待が違い、地元にも不満があるとも感じる。例えば、盆踊り復活の要望があった。よそ者であるLを頼らず、やりたい人が中心となり復活すべきだと言ったが納得してもらえなかった。また、学校時代の思い出の品々を集めた展示室も賛否両論がある。ある時、展示室に立ち寄った卒業生から、自分の学年の卒業アルバムが展示されていないとはけしからん、ここの管理を任せてやっているのに、と怒られた。自主提供など地元からのもっと素朴な参加がほしい。企画運営に積極性を示す地元住民はなく、様子を斜向かいに見ている人が多い。しかし、活動状況が新聞などに載ると喜び、『星くま』の存在自体は大いに気にしている。いずれはもっと多くの地域住民と一緒に活動したい。

NPOと町の考え方との間にも多少の相違がある。中山間地にある塩谷町は、『星くま』を都市と農村との交流を目指すグリーンツーリズム拠点とし、農業を再起したいと考えている。一方、NPOは自然観察や環境教育、子供の教育を重視しており、町とは少しズレがあると感じている。町の期待に部分的に協力する、というスタンスでやっていけるだろう。」

このように、企画運営者の立場から、廃校施設に対する地域住民や行政の高い関心と協力体制と共に、考え方の相違も認識し、協調できる方向性を模索しているとLは語った。

### (3) 運営協力者及び参加者の立場から見る廃校施設の価値

スタッフ計6名、参加者1組、それぞれにインタビュー調査を行った。いずれも、廃校施設の価値に対する回答には少し間があった。管理人兼常勤スタッフMは「廃校の価値は全部だが、中でも木造校舎の懐かしさを挙げる。今時の子供は木造校舎を知らないが、『わー、長い廊下がある』と喜んでいる。古い建物ゆえ屋根が一番心配だ。再生時は施設所有者である町が改修した為、地元住民の反対意見はなかった」、NPO募集のパートタイマーNは「廃校の価値は、子供の頃を思い出し懐かしいこと。童心に帰り、癒される」、パートタイマーOは「特別に豊かなありのままの自然や、宿泊料金の安さが魅力」、臨時スタッフPは「RC造や排気ガスに囲まれた日常生活を脱し、木造の温かさや自然によってストレスが抜けていくこと」と語る。また、昔遊び体験の指導者Qは「参加の経緯は、旧熊ノ木小学校とは無縁ながら、小学校教員等の経歴から検討委員に選定された。理事の削減時に、指導者として残らせてもらった。地域として学校再生は嬉しい」、天文教室の指導者Rは「解説を喜んでくれることが一番

嬉しい」と語る。参加者のS夫妻は「自然体験や昔遊びを子供が体験できる場所であることや安い価格が良い。学校に宿泊することにも興味がある」と語る。

このように、廃校施設の価値は、懐かしさや癒しとの意見が多く、他に周囲の豊かな自然環境が挙げられた。参加者は学校宿泊に期待し、価格設定も魅力の一つだと考えている。

#### 4. ケーススタディ3：千葉県和田町「自然の宿 くすの木」

##### (1) 千葉県和田町「自然の宿 くすの木」について

千葉県和田町にて1997年に活動を開始した「自然の宿 くすの木」(以下、「くすの木」)は、1873(明治6)年に開校し、過疎化により1995年に廃校となった旧上三原小学校を再活用した宿泊型体験学習施設(木造平屋建て、述べ面積838平方メートル)である。周囲に山や海があり、自然豊かな地域にある。企画運営は、地域住民が組織した「くすの木王国」(任意団体)が行っており、調理加工、農業、自然等の体験メニューを提供している。('くすの木' HP, 『廃校施設報告書』) 木造廃校舎2棟の内、1棟は内部を宿泊室にコンバージョンし、もう1棟は撤去の上で新築し、食堂等の共用施設を配置した。従来通りに使用する講堂には、創立以来の卒業生名を記した木製の氏名表や歴代校長の写真等が残る。



写真7: 「くすの木」外観

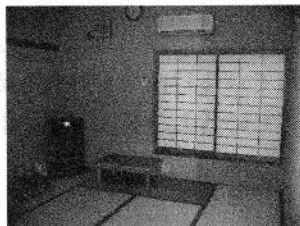


写真8: 宿泊室(旧教室)



写真9: ロビーと食堂  
(いずれも、筆者撮影)

「くすの木」が所在する千葉県和田町は、房総半島の南東部に位置する。1960年には、総人口9,108人、世帯数1,898戸であったが、年々減り続け、2000年には、総人口5,684人、総世帯数1,839戸、また農家数や経営耕地面積も半減している。近年は、観光振興にも取り組む。(和田町勢要覧, 2003) 和田港は、日本に4箇所ある小型沿岸捕鯨基地の一つであり、7・8月の2ヶ月間、国の管理下によりツチクジラ26頭の捕獲が割り当てられている。(千葉県 和田町, 2003, p.24) なお、和田町を含む安房8町村は、2006年3月31日を期日に「南房総市」として合併が決定している。(安房8町村 合併協議会 HP)

##### (2) 企画運営者の立場から見る廃校施設の価値

企画運営者の3人(鈴木稔、高橋憲男、北見英一)にインタビュー調査を行った。

「再生の経緯は、荒廃する廃校を憂いた地域住民が集まり手探りで行動を起こした。検討委員会を結成し、意見の相違から離脱者も出ながら3年かかって再生に至った。来客需要の有無を一番心配したが、再生前から受け入れていた県下4市の子ども会育成会が主催する夏キャンプの経験をベースに、宿泊や料理で客をもてなす交流施設にできるだろうと、地元も町も考えが全員一致した。見通し半分、やってみようという意気込み半分だった。

『くすの木』の運営は、町が地元自治体(上区)に運営委託し、更に地区から『くすの木王国』に運営委託している。営業活動はほとんどしていないが、口コミで予想以上の集客がある。行政の会合利用では県下全域から参加があり、今度は子供会を参加させよう、と横のつながり

で参加者が広がっている。クラブ活動や子供会等、多様な来館者がいる。

体験メニュー指導者のほとんどは地域住民である。農業特区の指定を受け、水稻栽培体験を2004年から始めた。『くすの木王国』が周辺農家から遊休農地を借り上げ、100平米区分けして体験オーナーを募る。外部組織と連携するメニューもあり、東京のNPOと町が主催する自然体験教室を、『くすの木』を主会場に年6回程度行っている。くじら講座が人気で、鯨の解体を早朝に見学に行く。来館者の感想には、ゆっくり過ごすのが楽しい、もっと学校らしい宿泊室を期待して来た、ホテル並みの施設を期待していた、など様々ある。

廃校施設の価値は、地域の中心的な拠り所として維持できたことだ。これは赤字覚悟で始動した最大の理由でもあり、現に地域住民の絆の維持に貢献している。行政も地区も学校中心に一体的に活動してきた経験から、学校に対する一人一人の愛着がある。かつては地区長から『今年の運動会はどうしましょう』と先生に相談していた。各行事とも生徒よりも父兄の方が多い程だった。隣近所同士、互いに助け合う生活が残る地域でもあり、街方に住む現代風な人とは考え方が違う気がする。それがいい、と言う来館者もいて、接客態度に表れているらしい。サービス精神とは違うが、食事には既製品を並べず手間を掛けている。現在、40人前後がスタッフとして勤務する他、周辺の清掃管理も含め、地区の人はかなり協力してくれている。地区としても廃校再生を喜んでいるだろう。」

このように廃校施設の価値は、学校時代と同様の地域コミュニティ拠点として、地域住民同士の絆を維持できることであり、かねてから行政と地域住民が一体的に学校行事を盛り上げてきた経験が、再生後の運営にも寄与していると、企画運営者は強く認識している。

### (3) 廃校再生と公民連携

「廃校再生の過程で町が地元の意見も組み入れたことが、以後の運営に大きく寄与している。四国の例では、行政指導で再生に着手したものの、地域の意見がまとまらずに任意の協力者のみで組織化する等、紆余曲折したようだ。地域住民の支援なしには困難だろう。

廃校舎は、行政判断に基づいて町が主導的に改修した。町の所有財産であり、住民は使い方を多少意見する程度だった。整備資金には県の補助事業の当てがあった。補助事業として2億5千万円程かかり、その内、町は2-3千万円の実質負担で改築できたはずだ。

『くすの木王国』は上区自治会が運営する任意団体だが、NPO等の法人格取得の話もある。その場合、今は曖昧のよさで運営している部分を明解にする必要がある。運営費は年間300万円の補助を町から受けているが、これがなければ周辺の民宿並み料金は必要だろう。視察事例の中には、町の出向者や三セクに対し町が何千万も赤字補填する事例もあった。」

### (4) 地域住民主体の運営体制における課題

「運営について、後継者育成、人材確保、事業性、今後の方向性、町との関係など、現在は大小様々な課題がある過渡期だと認識している。地区には多様な意見があり、まとめるには苦労がある。最初は皆に使命感があり、相当無償で働いたし、意気込みがあった。しかし、今はその勢いも落ちてきていると感じる。組織を含め、原点に返って見直す時期であり、次の世代に当初の考え方をスムーズに引き継ぐ時期なのだろう。再生検討時に山梨の視察先で、『10年経つとスタッフが皆年配者になり、後継者不足となる。今から考えておくべき』と言われたが、今になって切実にそう思う。運営スタッフに関しては、ボランティア的な参加状況で、十分な賃金を支払えずにいる。皆、本業があり、会社勤務者は土日しか参加できない。楽しさと大変さの両方がある。スタッフは子育て最中の世代に移りつつあるが、一番忙しい朝と晩の時間帯に

参加できない。引継ぎ時期なのだが難しさがある。

事業性に関し、従来方針の維持か、商業ベースへの切り替えか、難しい選択の時期にある。体験メニューは手間の割に参加費は安い。今は多少でも利益があるが、商業ベースにしないと、いつまでも熱気だけでは無理だろう。また現在は、休日、夏休み、正月に客入りが集中している。送迎バスを購入すればシニア層を平日に迎えられるかもしれない。規制もあり何でもできる訳ではないが、客入りを増やすためにいろいろと取り入れた方がいいのかどうか、思案することも多い。旅館組合からの反対は、運営開始当初から今もってある。1年半後（2006年春）には8町村が合併予定で、今後も町が補助を続けるのかどうか不明だ。後継者育成や事業の方向性等と合わせ、課題が多い時期だといえる。」

このように、地域コミュニティ拠点の維持のために地域住民が廃校再生に立ち上がり、行政と連携しながら順調な運営を達成してきた反面、事業性、後継者への引継ぎ、合併を控えた行政との関係など、今後検討すべき課題も多々あると、企画運営者は語った。

## 5. 廃校施設の実態と特性

### (1) 廃校施設の再生に伴う整備財源及び利用料金設定

本稿が対象とする11事例に関し、再生整備財源等を『廃校施設報告書』より調査した。整備財源として、国又は都道府県による補助金を活用する事例は7事例、自治体一般財源の活用は6事例、他に、合併特例債、まちづくり特別対策事業債と、11事例中10事例が再生整備のために公的資金を活用している。「森風」が唯一の未活用事例である。

ここで、「兵庫県・篠山チルドレンズミュージアム」は、1999年4月に旧多紀郡四町が合併して誕生した篠山市（合併時人口約47,000人）によって、合併特例債を活用して整備され2001年7月に開館した。これは、「廃校の木造校舎の再利用といっても、敷地約二万二〇〇〇平方メートル、延べ床約三〇〇〇平方メートル、事業費は約十八億円。新築のハコもの施設なみの投資で、合併特例債を活用した施設の第一号である」（松本，2002，p.185）という。ここでの事業費は、廃校舎の改修費と共に展示品等制作費も含むと考えられる。廃校舎のコンバージョン等に要した建築等工事費は約8億円、他に外構工事費約1億3千万円を要した。（建築設計資料，2004，p.123）この時、建築等工事費の延べ面積に対する坪単価は約86万円となる。小規模建物ゆえ、坪単価は割高になりがちで、かつワークショップ棟など一部増築を含む（建築設計資料，2004，p.122）ものの、安価な投資とはいえないだろう。ちなみに、2001年4～6月、近畿地区での新築事務所ビルの平均施工単価は58.1万円／坪（日経アーキテクチャ，2001b，p.39）、集合住宅のそれは48.6万円／坪（日経アーキテクチャ，2001a，p.45）である。また、「くすの木」では、補助金による事業費に2.5億円程度かかっている。この場合、坪単価は約98万円となる。

運営・維持管理に関しては、施設利用料や会員寄付など、利用者からの徴収料金を財源とする事例は10事例、公的資金によるものは7事例と、多くの事例で利用者と行政の両者に負担を求めている。利用料金設定は、大人一人分宿泊料（一泊二食付き）で、¥5,000～6,800計4事例、¥9,000と¥1,500各1事例と、総じて手頃な料金設定だといえる。

このように、本事例の多くは、公的資金で施設整備をし、運営費用は行政と利用者の双方が負担するビジネスモデルであり、また整備に要した費用は決して安価とはいえない。

### (2) 廃校施設再生に対する企画運営者の意識

廃校施設再生に対する企画運営者の意識について、アンケート調査を行った。（回答者数計

15人) 廃校再活用に至った理由は、「長年慣れ親しんできた廃校施設を、何かのかたちで再活用しなかったから」「地域の人々が廃校施設の再活用を望んだから」が各14人と、多くの回答者に肯定された。一方、「新しい施設を建設するよりも経済的だったから」(6人)、「行政より廃校施設を再活用するように要請があったから」(5人)は否定的に捉えられ、整備コスト抑制や行政指導という理由付けが再生を促した訳ではないと伺える。また、「篠山チルドレンズミュージアム」に関し、「当館の場合は改築の方が負担大」との回答が行政担当者よりあった。次に、廃校再活用のメリットに関し、「地域住民のサポートを受けやすいこと」(12人)、「懐かしさを感じること」「子供の歓声でにぎやかだったことが想像できること」(各11人)が広く肯定された。一方、否定的な回答が多かった理由は、「比較的費用をかけずに済むこと」「環境負荷低減をアピールできること」(各5人)であった。

このように、再生整備費用の抑制に関し、廃校再生のインセンティブとしても、また廃校施設を活用するメリットとしても否定的に捉えている企画運営者が比較的多いといえる。

## 6. 分析と考察

### (1) アフォーダンス理論による分析

3つの事例にて、廃校施設の価値は人により多様に捉えられていた。これら価値と廃校再生との間のメカニズムを、生態心理学におけるアフォーダンス理論を用いて分析する。

アフォーダンス理論<sup>4)</sup>によれば、物体、場所、事象、他の動物、人工物等、身の周りの環境には多様な情報(=アフォーダンス)が存在し、人や動物は無意識の内にそれらを感じ取ることで様々な行為が誘発されている。(佐々木, 1994, 1996) また、池上はアフォーダンスに関し、「あるものが私たちにあることを可能にしてくれるということは、そのものがそれがなければ出来ないことを私たちに可能にしてくれるという意味で、私たちにとって特別な<意味>を持っているということに他ならない。そして、そのような<意味>を持つものとして把握される限りにおいて、そのものは単なる<モノ>ではなく、一つの<記号>として私たちに対していうことになる」(池上, 2002, pp.45-46)と指摘する。

当理論をケーススタディに適用し、価値として挙げられた様々な内容に立脚して考えると、人々(=解釈者)は各々の関心に応じて様々なアフォーダンス(=記号内容、意味)を廃校施設(=記号表現)から読み取っており、そこから廃校施設の価値を認識し、また多様な行為や感情が生じていると分析できる。以下、分析の結果を表1に示す。

ここで、当然ながら、活動への関心や人と交流する楽しさが参加理由となる等、必ずしも全ての行為が廃校施設のアフォーダンスから派生しているとは限らない。この点も踏まえた上で、廃校施設のアフォーダンスと廃校再生との間にある関係を、図1に示す。

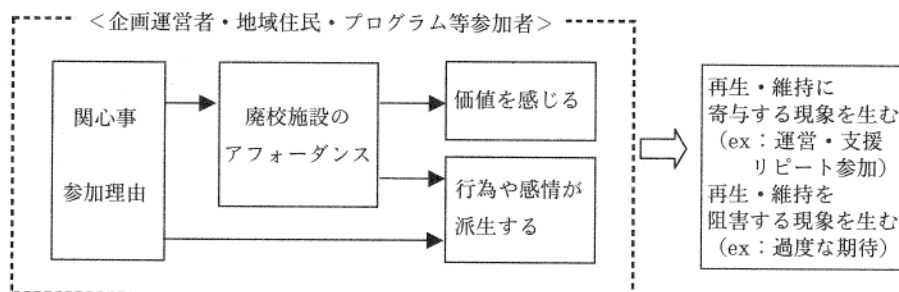


図1 廃校施設のアフォーダンスと廃校再生との関係(概念図)

出所: 筆者作成



表1 廃校施設のアフォーダンスと派生する行為や感情

事例	調査対象者	関心があること	廃校施設のアフォーダンス	廃校施設を利用する価値	派生する行為や感情
森	企画運営者 (吉成・永留・石川)	[環境教育]、 [子どもの居場所づくり]、 地域や実生活とのつながり の中で行う環境教育	地域コミュニティの拠点	地域にくっついている根っこ、 地域住民の生活や想いのつながり、 卒業校に対する心のつながりや 愛着、 地域住民の支え	企画運営、 地域とのつながりを維持・発展 する努力、 廃校を活動場所として選択
森	地域住民	廃校施設をきれいに維持すること		N.A.	維持管理への高い関心、 運営支援、 想いを表現するカタチの設置
星	指導スタッフ Q 地域住民、 卒業生	[子供の教育]、 地域活動、 廃校施設の再生と有効活用	自己アイデンティティ	N.A.	運営支援、 地域として学校を残せてよかったと思う、 過度な期待
く	企画運営者 (鈴木・高橋・北見) 地域住民、 卒業生	地域コミュニティ拠点の維持、 学校に対する愛着		地域コミュニティ拠点の維持	企画運営、 運営支援、 地域住民のつながりの維持、 再生をうれしく思う
星	企画運営者 L 臨時スタッフ P	安らぎや癒しの場の提供、 [子供と自然の育成]		木造廃校舎の癒し効果、 [子供の活動場所]	癒される、 廃校を活動場所として選択、 企画運営、 運営支援
星	常勤スタッフ M パートタイマー N	N.A.	学び舎	木造校舎の懐かしさ	懐かしさ(自己イメージとの類似性)を感じる、 癒される、 企画運営、 運営支援
星	来館者(中高年、他)	N.A.	木造廃校舎の癒し効果	N.A.	懐かしさ(自己イメージとの類似性)を感じる、 学校らしさを期待する、 懐かしさを期待して来館する
星	参加者 S	N.A.		学校に泊まること、 [自然体験等の場]、 [安価な利用料金]	非日常性(自己イメージとの相違)を楽しむ
星	来館者(子供)	N.A.		N.A.	非日常性(自己イメージとの相違)を楽しむ
森	講座講師 (酒匂)	[バーマカルチャー]、 大人と子供への環境教育		子どもたちが集まってきやすい場所、 [実体の伴った環境教育を実践できる場]	企画運営
森	参加者兼臨時スタッフ A 参加者 C	子供	子供の活動場所	かつての小学校に込められていた想い、 子供の歓声が染み付いていること	運営支援、 リポート参加
星	企画運営者 L	[安らぎや癒しの場の提供]、 子供と自然の育成		[木造廃校舎の癒し効果]、 子供の活動場所	[癒される]、 企画運営
森	講座講師 (酒匂)	バーマカルチャー、 大人と子供への環境教育	サステイナビリティ	[子どもたちが集まってきやすい場所]、 実体の伴った環境教育を実践できる場	企画運営
森	参加者 B	バーマカルチャー		バーマカルチャー講座開催場所として、施設や環境面で実体が伴っていること	リポート参加
森	参加者 D	[バーマカルチャー]	宿泊場所	泊まれる施設であること	リポート参加

出典：インタビュー及び調査をもとに考察を加え、筆者作成

注：・「事例」の欄は、森＝「森風」、星＝「星くま」、く＝「くすの木」

・「関心があること」の欄は、インタビュー調査の中から筆者抽出

・「廃校施設を利用する価値」の欄は、問いに対する回答を記載

・「行為や感情」の欄は、インタビュー調査及び観察から筆者抽出

・[ ]内記載事項は、同段に記載するアフォーダンスと特に関連しない項目

## (2) 廃校施設のアフォーダンス1: “地域コミュニティの拠点” “自己アイデンティティ”

3つの事例に共通して認識されている廃校施設のアフォーダンスは、“地域コミュニティの拠点”や“自己アイデンティティ”だといえる。

「森風」の場合、企画運営者は青い車掌車から「PTAの方々と先生の熱意」(吉成, 2003, p.122)を読み取り、活動場所の選定に至った。これは「まぎれもなく地域の人々が支えてきたセンターだったところ」(吉成, 2003, p.121)、すなわち“地域コミュニティの拠点”というアフォーダンスを廃校施設から読み取っての行為に他ならない。実際、地域住民にとって廃校施設は“地域コミュニティの拠点”を意味し、それ故に地域住民の様々な行為に発展していることは、残されたカタチや行動から伺える。例えば、地域住民が据えた廃校記念の石碑は、学校時代の出来事の積み重なりから醸成された人々の記憶や、閉校後もつながりを維持したいとの想いをカタチにしたものだろう。青い車掌車や石碑から、廃校はかつて本当に地域住民にとって地区の拠点だったといえ、“廃校施設をきれいに維持するよう要望”“高い関心”“差し入れや運営支援”等の地域住民による“つながり”は、“地域コミュニティの拠点”というアフォーダンスを廃校施設から読み取るが故に派生する行為だといえるだろう。企画運営者は、“つながり”の維持・発展のために廃校施設という記号の取り扱いに配慮し、また地域行事への参加やコミュニティカフェの建設、活動を通じて子供から大人へとつながりを広げる等、更なるつながりを築く努力を積み重ねてきた。その結果、新たなつながりが発展的に醸成され、地域住民による支援体制を生んだといえる。

このように廃校施設から“地域コミュニティの拠点”をアフォーダンスとして読み取ることによって、地域住民による高い関心や運営支援という行為に発展し、企画運営者もまた地域住民と廃校施設との“つながり”の維持・発展に努めながら「森風」を企画運営するに至っているといえるだろう。今もって地域住民の気持ちとつながりながら、その支援を引き出す「場の力」(永留談)が廃校施設には存在し、企画運営者の活動を支えているのである。

「星くま」や「くすの木」も同様に、地域住民は廃校再生を願って働きかけ、企画運営や支援に至った。企画運営者が“地域コミュニティの拠点の維持”を廃校施設の価値として明確に認識するように、各事例とも“地域コミュニティの拠点”というアフォーダンスから、地域住民による“運営・支援”“再生を喜ぶ”等の行為や感情が派生しているといえる。

ここで、地域住民のうち卒業生の場合、様々な行為や感情の源泉には、“卒業校に対する心のつながりや愛着”(永留談)を生む“自己アイデンティティ”というアフォーダンスも同時に存在し、双方のアフォーダンスが作用して様々な現象が生じているといえる。

これらアフォーダンスの効能の一つは、地域住民が企画運営や体験プログラム指導の役目を引き受け、プログラム提供が可能となることにある。外部の専門家と連携する場合でも、地域住民の支援なしに活動を行うことは困難だと、企画運営者は指摘する。別の効能は、地域住民同士の“絆”を保つ、すなわち地域コミュニティ拠点機能の維持である。

ここで、廃校施設と“地域とのつながり”は決して安定的とはいえない。よって、「森風」の企画運営者は記号としての廃校施設の扱いに配慮し、他の事例では地元住民の強くて多様な想いのある方向に収束することに困難を伴った。このように、廃校施設から派生する“地域とのつながり”は、その維持・発展に常に努力を要するといえるだろう。

さて、同じアフォーダンスは“過度な期待”ともなり得る。「星くま」の地域住民や卒業生が期待した盆踊りや卒業アルバムの例である。また、新聞掲載を喜びつつも傍観する地域住民等、“地域コミュニティの拠点”や“自己アイデンティティ”というアフォーダンスから派生する現象は、“高い関心を寄せる”という点では一致するが、その先は一樣ではない。廃校の

再生・維持に寄与する現象も、反対に阻害する現象も、地域住民の生活に深く関与する学校施設という出自故に生じるもので、廃校施設を観光的に活用するには、“運営・支援”“再生を喜ぶ”など再生・維持に貢献する現象を導き出すことが重要だろう。

## 2) “学び舎”というアフォーダンス

“懐かしさを感じる”“童心に帰り癒される”等の価値観や行為は、誰もが経験した学校生活から連想する“学び舎”のイメージと、目の前の廃校施設から読み取る“学び舎”というアフォーダンスとの間の類似性から派生するといえる。それは、廃校施設に“懐かしさ”を感じる時、“木造校舎”“長い廊下”等の表象がよく言及される。中高年者には見覚えある木造校舎であり、若者にも教室が並ぶ長い廊下や朝礼台等、各自の学校生活にて目にしたアイテムや空間との対比から類似する表象を廃校施設に見出し、過去を回顧すると共に、木造特有の素材的な温かさが重なり、“懐かしさ”や“癒し”を感じるといえる。

ここで、前述した“地域コミュニティ拠点”や“自己アイデンティティ”というアフォーダンスは、観察者にとって唯一固有の廃校施設ゆえに知覚できるアフォーダンスだが、“懐かしさ”など自己イメージとの対比において感情が派生するとき、対比となる廃校施設は一般性をもって捉えられている。よって、ある種の普遍性をもつ“学び舎”らしい表象要素を抽出し模倣的に作り出すことで、“懐かしさ”という価値を擬似的に再現できる<sup>5)</sup>。

一方、アフォーダンスと自己イメージとの差異に起因すると考えられる現象もある。“学び舎”というアフォーダンスを廃校施設から読み取る時、“学ぶ場所”というイメージと、そこでの実体験、すなわち“泊まり、自由に過ごし、遊ぶ”こととの間にミスマッチ感を無意識に感じ取っている。ここに、“廃校に泊まる”という観光体験に、非日常性や意外性という楽しさの発見があるといえるだろう。過去の経験から、あらかじめ“学び舎”というイメージを持つが故に、意外性を期待して参加者は来館し、また“学校らしくない”と失望するのである。これは、“宿泊施設”というアフォーダンスを読み取った参加者にとって、廃校施設は宿泊機能を提供するモノであり、そこに特別な楽しみは付随しないこととは対照的である。また、子供が「わー、長い廊下がある」と喜ぶ時も同様に、普段通っている近代化された学校施設に伴う“学校”のイメージと、眼前の木造校舎の廊下という実体験との間から感じ取る、同じようで異なる微妙なズレに面白さを感じているといえる。

このように、“学び舎”というアフォーダンスを廃校施設から読み取る時、各自の“学び舎”という自己イメージとの類似性から“懐かしさ”や“癒し”を、また差異から“意外性”や“非日常性”を感じ、いずれも、観光体験に楽しさをもたらしているといえる。

## 3) アフォーダンスから派生する“リアリティ感”

「森風」の例にて、参加者と講師の多くは回答に間があり、廃校再活用自体をあまり意識していない。しかし、各人の関心事や参加理由との関連から、“サスティナビリティ”や“子供が集まる場所”というアフォーダンスを読み取り、そこから廃校施設の価値を無意識に知覚していると伺える。例えば、参加者Bはパーマカルチャーに関心があり、「森風」の講座に東京から岩手までリピート参加している。Bは、廃校施設の価値に“パーマカルチャー講座開催場所として、施設や環境面で実体が伴っていること”を挙げたが、これは“廃校施設を再利用した環境”から“サスティナビリティ”というアフォーダンスを感じ取るが故に、認識できた価値だろう。同様に、“地域と実生活とのつながりの中で行う環境教育”に関心がある吉成も「…自然を生かすこと。自然といっしょに生きること。自然のエネルギーを慈しむこと。廃校再利用のプロセスにこれからの豊かな地域がよみがえる…」(吉成, 2003, p.124)と評し、“サスティナビリティ”というアフォーダンスから、環境教育活動の場として廃校施設を選択したと

いえる。ここで、“実体が伴っている”との感想について考える時、廃校施設のアフォーダンスに対し、“リアリティ”すなわち“そうあることが至極当然で、実体を伴っていること”をBは感じているといえる。これを観光体験の観点から見ると、個々人が関心をもつ事柄に関連するアフォーダンスを廃校施設から読み取り、そこに“リアリティ”を感じることで、体験への満足感が高まるといえるだろう。

同様に、子供への関心から読み取る“子供が集まる場所”というアフォーダンスにも“リアリティ”が付随し、そこから満足感を得ることで、“「子どもデー」にスタッフとして長年参加”“企画運営”等の行為は持続しているといえる。このように、廃校施設はアフォーダンスに対して“リアリティ”を実感させる役割を果たしており、そこで得られる満足感から、リピート参加、運営、支援という行為に発展しているといえるだろう。

前述した“地域コミュニティの拠点”や“自己アイデンティティ”等のアフォーダンスに対しても“リアリティ”は派生している。それは、地域住民や卒業生にとっての廃校施設は、他施設での代用も他所での再現も不可能な、唯一固有の存在であり、そこから得るアフォーダンスに“リアリティ”を感じるのは至極当然であろう。また、“学び舎”というアフォーダンスも、そこから生じる諸現象が依拠する表象は“かつて本当に学校であった廃校施設”という実物の表象ゆえ、リアリティが宿ることは容易に想像がつく。しかし、「廃校舎の屋根が心配」との声もあり、建物本来の性能、すなわち外部環境から内部環境を守るシェルター機能という観点からは、必ずしも万全の状態のものばかりとはいえない。廃校施設がリアリティ感ある記号として機能する為の表象性の保持は、建物として求められるある一定水準の機能を確保するための改修との兼ね合いの中で実現されるのである。

このように、各アフォーダンスに対し、廃校施設は“リアリティ感”を付与している。そこから、多様な満足感が生み出され、観光的利用を持続させているといえるだろう。

### (3) 廃校施設再生を促す諸要因

廃校施設の観光的利用への再生に関し、促進要因がいくつか挙げられる。1つめは、行政（＝公）と民間人や地域住民（＝民）による公民連携体制の重要性である。地域住民や第三者的立場の民間人が再生を働きかける場合、廃校施設の所有者である行政の協力なしには、再生プロセス自体が始動し得ない。再生時に必要な改修工事に対しても、行政が主導する場合は、廃校施設の取り扱いに敏感な地域住民も納得する傾向がある。一方、行政単独での再生働きかけや企画運営体制には限界もあり、運営や支援に自発的に協力する民の立場の人がいてこそ、再生や運営が可能となるといえる。運営時は、公と民が各々に得意とする役割を補完的に果たすことが重要である。常に公民の思惑が一致するとは限らず、連携体制の構築には当事者同士の努力を要する。一方、民業圧迫等の事態を避けるべく、適切な行政支援のあり方には十分な配慮が必要だろう。現在の公民連携体制のみならず、過去においてその地域で培われてきた連携の経験は、廃校再生に対する理解や支援の素地として寄与するといえる。持続的な地域コミュニティ活動を通じて、行政や地域住民の間に育まれた「地域のエートス」（井口，2002，p.19）、すなわち、各地域固有の市民性が文化的な土壌となり、廃校施設の出現に際し、うまく対処できたといえるのかもしれない。プログラム提供の観点からは、地域に存在する多様な資源を有効活用することで、企画運営に多様性と柔軟性が生まれ、より多くの利用者の満足につながるといえるだろう。

2つめの要因は、事業性である。本稿の事例の多くは、再生整備費用を公的資金が負担し、後の運営費用を行政と利用者の双方が負担するビジネスモデルを採用している。再生整備費用

と運営費用との連動性が低いことが、運営コスト負担の軽減に、ひいては手頃な利用料設定につながっていると考えられ、参加者には歓迎されている。しかし、新築より安価とは限らない整備費用を公的資金で負担することへの議論もあり、検討の余地がある。前述の通り、廃校施設固有のアフォーダンスにより再生・維持に寄与する多くの現象が生じ、これは新築の建物等では派生し得ないものである。故に、整備費用の多寡によって単純に廃校施設再活用の意義を判断することは避けるべきだが、事業の持続性や財政の健全化等の観点から、今後の検討課題が挙げられる。ひとつには、廃校を再生・維持・運営する目的を明確化し、関係者間で目的と要するコストに関する共通認識を持つよう努めることであろう。時の経過と共に共通認識も更新し、行政・民間・利用者に対して目的に応じた費用負担を求めることが、事業の継続性と財政の健全化につながるだろう。2つめは、再生整備に要する費用の妥当性を検証するシステムの導入だろう。整備コストの抑制を理由に再生を選択したことを否定する企画運営者が比較的多かったのは、自らが費用負担を強いられない分、コスト抑制をあまり意識せずとも再生を実現できているという側面も一因をなしていると考えられる。公的資金の有効活用のために、再生整備の目的とそれに要する費用の妥当性や整合性を検証するシステムの導入は、今後検討すべき課題であろう。

3つめの要因には、参加者自身が生み出す商品性が挙げられる。参加の理由である“他の参加者と話す楽しみ”とは、参加の動機となる楽しさ、いわば“商品”づくりに参加者自身が携わることで生まれるといえる。これは、プログラム指導者等にとっても同様に参加動機となり得ている。このように、“参加者同士の偶発的なふれあいから生まれる楽しみ”という商品は、運営者が提供する商品（体験プログラム等）とは別に、参加を促す効果をもたらし、廃校施設の観光的利用を持続させることに寄与しているといえるだろう。

## 7. まとめ

①廃校施設の価値は多様に捉えられている。ここから分析すると、②廃校施設は固有の意味（＝アフォーダンス）を有する記号的役割を果たし、そこから派生する多様な現象が相重なることで廃校施設の再生・維持はなされているといえる。③廃校再生の促進要因には、公民連携体制による取り組み、事業性、参加者自身が生み出す商品性が挙げられる。

これら廃校のアフォーダンスに起因する様々な現象や促進要因に留意することで、文化財的な価値がない廃校施設で、かつビジネスに適する立地とはいえない過疎地にあっても、観光的利用に供する施設への再生を促進し、新たな交流の場を提供できるだろう。

### 【謝辞】

研究科の枠を超えてご指導いただいた立教大学観光学部・安島博幸教授、及び助言いただいた日本観光研究学会前会長・原重一氏に、厚く御礼申し上げます。また、インタビュー調査にご協力下さった、「森と風のがっこう」「星ふる学校『くまの木』」「自然の宿 ぐすの木」の多くの方々、アンケート調査にご協力下さった方々に心より御礼申し上げます。

### 【注】

1) 「岩手県葛巻町／森と風のがっこう」「栃木県塩谷町／星ふる学校 ぐまの木」「千葉県和田町／自然の宿 ぐすの木」「山梨県須玉町／三代校舎ふれあいの里」「愛知県設楽町／豊橋市神田ふれあいセンター」「三重県宮川村／大杉谷自然学校」「兵庫県篠山市／篠山チルドレンミュージアム」「愛媛県大三島町／大三島ふるさとの憩の家」「愛媛県河辺村／ふるさとの宿」「高知県西土佐村／西土佐環境・文化センター 四万十楽舎」「長崎県小値賀町／野崎島自然学塾村」の計11事例。

2) 調査票は、「yes/no/どちらでもない」の三択形式計19問、選択回答形式計2問、自由解答計2問、合計23問で

構成した。2004年9月9日(木)郵送配布し、2004年9月27日(月)を回収期限とした。回収状況は、7事例計9校中8校より計15名分の回答を回収した。

- 3)岩手県「森と風のがっこう」(2004年7月31日～8月1日)、栃木県「星ふる学校 『くまの木』」(2004年9月19日～20日)、千葉県「自然の宿 くすの木」(2004年10月10日)にて、企画運営者や参加者に対する非構造化インタビューや観察をそれぞれ行った。
- 4)アメリカの知覚心理学者、ジェームス・ギブソンによって1960年代に完成された理論。造語であるアフォーダンス(affordance)は、「～ができる、～を与える」等を意味する動詞「アフォード(afford)」を語源とし、身の回りの環境が人や動物に対して提供する「情報」を意味する。
- 5)「三代校舎ふれあいの里」(山梨県須玉町)では、「おいしい学校の給食」と名づけたカレーを先割れスプーンで提供している。メニューや食器といった、学校給食にある表象要素を抽出し、レストラン商品に応用することで、郷愁性という商品価値を提供している事例である。

#### 【参考文献】

- 廃校施設の実態及び有効活用状況等調査研究委員会(2003)『廃校施設の実態及び有効活用状況等調査研究報告書』, 文部科学省.
- 井口貢編著(2002)『観光文化の振興と地域社会』, ミネルヴァ書房.
- 池上嘉彦(2002)『自然と文化の記号論』, 放送大学教育振興会.
- 松本誠(2002), 「合併モデル都市」の夢と現実(兵庫県篠山市), 自治・分権ジャーナリストの会編, 『この国のかたちが変わる: 平成の市町村大合併』, 日本評論社.
- 中野善浩(1995), 「社会の自立化をデザインするパーマカルチャー」, 『BIO City』, no.5, pp.57-64.
- 佐々木正人(1994)『アフォーダンス——新しい認知の理論』, 岩波書店.
- 佐々木正人(1996)『知性はどこに生まれるか ——ダーウィンとアフォーダンス』, 講談社.
- 鈴木重男(2001)『ワインとミルクで地域おこし: 岩手県葛巻町の挑戦』, 創森社.
- 建物のコンバージョンによる都市空間有効活用技術研究会編(2002)『コンバージョンによる都市再生』, 日刊建設通信新聞社.
- 吉成信夫(2003), 「子どもの環境教育と地域の再生」, 山田晴義編, 『地域再生のまちづくり・むらづくり ——循環型社会の地域計画論』, ぎょうせい, pp.111-136.

#### 【参考資料】

- 千葉県和田町(2003)『ネイチャー・ガイド わくわく和田』, 千葉県和田町.
- 千葉県和田町(2003)『和田町勢要覧』, 千葉県和田町.
- 建築思潮研究所編(2004)『建築設計資料: 98用途変更—コンバージョン』, 建築資料研究社.
- 日経BP社(2001a), 「コスト&プライス—集合住宅」, 『日経アーキテクチュア』, 日経BP社, 2001.07.09, pp.44-45.
- 日経BP社(2001b), 「コスト&プライス—事務所」, 『日経アーキテクチュア』, 日経BP社, 2001.07.23, pp.38-39.

#### 【Internet】

- 安房8町村 合併協議会 <http://www.town.tomiura.chiba.jp/gappei/> [2004年11月21日閲覧]
- 千葉県和田町 体験交流施設自然の宿 くすの木 <http://www.town.wada.chiba.jp/kankou/sisetu/kusunoki-index.html> [2004年5～6月閲覧]
- 千葉県和田町 <http://www.town.wada.chiba.jp> [2004年11月21日閲覧]
- 岩手県葛巻町 森と風のがっこう <http://www5d.biglobe.ne.jp/~morikaze/gakkou/> [2004年5～6月閲覧]
- 岩手県葛巻町 <http://www.town.kuzumaki.iwate.jp/> [2004年5～6月閲覧]
- 文部科学省 廃校にふれあいの里 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyosei/03062401/index.html](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyosei/03062401/index.html) [2004年5～6月閲覧]
- 栃木県塩谷町 星ふる学校「くまの木」 <http://www8.ocn.ne.jp/~kumanoki/> [2004年12月23日閲覧]
- 栃木県塩谷町 <http://www.town.shiyoa.tochigi.jp/> [2004年5～6月閲覧]
- 山梨県須玉町 三代校舎ふれあいの里 <http://www.sutamatown.jp/nougyou/taiken/taishou-kan.htm> [2004年5～6月閲覧]